

# 高知大学 病院 ニュース

〔 編集 〕

高知大学病院ニュース  
編 集 委 員 会  
委員長 森 信 繁

〔 発行人 〕

高知大学医学部附属病院  
病 院 長 横 山 彰 仁



## 新任のご挨拶

検査部長兼 輸血・細胞治療部長(病態情報診断学講座教授) 松村 敬久

このたび、杉浦哲朗前部長の後任として4月1日付で、本院検査部長を拝命いたしました。

私は、昭和63年に高知医科大学を卒業し(5期)、卒業20年以上を内科・循環器科医として働いてまいりましたが、私の専門が心エコー検査であるという縁もあり、4年前から検査部に異動、その後、臨床検査専門医資格を取得し現在に至ります。

検査部の朝は、昭和56年の検査部創設以来30年以上続く午前8:20からの朝礼で始まります。検査部長・技師長以下50名ほどの職員全員が出席します。臨床検査技師は午前7:30頃には機器を立ち上げ、精度管理を済ませており、8:30からの外来採血開始への準備は万端です。さあ、朝礼が終わりますと外来採血が始まります。平均400名/日の採血は最大8ブース8名(技師・看護師)で行います(看護部のご援助感謝申し上げます)。

私も医師は電子カルテをクリックするだけですが、採血が出来なければ検査は始まりません。検査技師・教員は検査部の外からは見えないところで頑張っています。医学博士を取得している検査技師もいます(!)。私は、検査部技師と専門診療科や部門の医師、看護師など多職種の方々をつなぐ接着剤のような役割を果たしてまいります。

検査部は、初代部長 佐々木匡秀教授のもと、世界に先駆けたベルトライン搬送システムが開発され大きく発展しました。二代部長 杉浦哲朗教授のもとでは、最新の検体検査システムの導入と、生体検査部門の大幅な拡充が行われ、医療体制の変化に対応しながらさらに発展しました。私は、諸先輩の築いてこられた歴史と伝統のもと、甚だ微力ではございますが、少子高齢化の進む時代で検査部をさらに発展させ、患者さんと社会に貢献できるよう全力を尽くしてその職責を全うする所存でございます。何卒一層の御指導と御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 「本院の熊本地震での支援活動について」

### DMATチーム活動

第1陣として4月16日から20日まで熊本県の菊池市と阿蘇市へ、第2陣として4月20日から23日まで阿蘇市へ、各陣5名ずつがそれぞれ派遣されました。

報道等でご存知のとおり、今回の地震では外傷傷病者等への救命医療や広域搬送などのニーズはなく、現地では、DMAT活動拠点本部でのロジスティック業務(DMAT活動に必要な連絡調整・情報収集等の後方支援)や、避難所・医療機関等を訪問してアセスメント(医療ニーズの把握等)を行い保健所や市町村につながる支援などを行いました。

今回の派遣では、真夜中の発災・派遣要請に対する連絡体制や

日頃の資機材管理体制が不十分で出発が遅れたこと、患者搬送能力が無いために出来る支援業務に制約があることなどの課題が見つかりました。また、本部を運営する際のロジスティック機能の重要性や、そのための日頃の訓練がいかに大切であるかを痛感しました。

DMATの活動は、派遣されたメンバーだけでなく、連絡調整などの後方支援や、資機材・薬品の準備、職場での勤務調整・仕事のフォローなど、多くの皆様のご協力に支えられています。今回の派遣でも快く送り出していただき、また、多くの励ましや労いの言葉もいただきました。皆さん本当にありがとうございました。



### DPATチーム活動

DPATとは「Disaster Psychiatric Assistance Team」の略で、大規模な自然災害などの際に各都道府県から派遣される災害派遣精神医療チームです。チーム構成は精神科医、看護師、業務調整員を基本とし、必要に応じて薬剤師、保健師、精神保健福祉士、心理士などが加わります。東日本大震災の際に派遣された「こころのケアチーム」と比べるとより組織化されていることに加え、発災後72時間以内の先遣隊派遣を位置づけたことや、DMHISSと呼ばれる災害精神保健医療情報支援システムを導入していることなどが違います。

高知県からは4月21日～5月22日にかけて計7チームが派遣され、第5班と第7班に本院の精神科医師や看護師、作業療法士が参加しました。高知県が担当したのは熊本市西区役所圏内、自宅倒壊などの震災被害が比較的少なかった地区です。

5月12日の段階で9箇所あった避難所では、夜間帯を中心に599名が過ごされていましたが、日中は家の掃除や仕事など色々な用事でほとんどの方が出掛けており、周囲の医療機関もその機能を保っていました。我々の派遣時期には新規相談は減っており、支援者支援の相談や元々精神疾患を抱える方の避難所での問題の相談が主な活動となりました。

## 先端医療学コース学生顕彰制度「相良賞」

《先端医療学推進センター長 本家 孝一》

**研**究は将来の学問に対する投資です。医学生が在学中に習得する知識や技術は過去の遺物です。知識量は年々指数関数的に増加していますので、医師は過去の知識を得るだけでは不十分で、未来の高度医療に対処できる能力をもつことが求められます。『先端医療学コース』では、医学という科学原理の思考と最先端医療開発研究の実践を通して課題を探求し解決する能力を磨き、主体性とリサーチマインドを涵養いたします。研究を行うには正規のカリキュラム時間だけでは不十分なので、放課後や休日にも研究をしなければならないこともありますが、学生達は頑張って研究しています。その甲斐あって、研究成果を学会で筆頭演者として発表し、優秀演題賞を受賞する学生が出て来ました。

本学でも独自に優秀な学生を顕彰するために、先端医療学推進センターの産みの親である相良祐輔前学長の名を冠した『相良賞』を平成23年度から授与しています。昨年(平成27年)度は、3年間の研究成果を評価する金賞は残念ながら該当がありませんでしたが、学年毎に1年間の研究成果を評価する銀賞は、2年生1名(現3年生)、3年生1名

(現4年生)、4年生2名(現5年生)の4名が受賞しました。今年度の最初の授業日(平成28年4月18日)に3学年の『先端医療学コース』履修生全員を集めて、相良賞授与式と受賞者による研究発表を行いました。

将来、地域医療を目指す学生諸君にとっても、科学的思考能力は不可欠であり、『先端医療学コース』はこれを身につける絶好の機会です。是非、『先端医療学コース』にチャレンジして相良賞をゲットしてください。



受賞者を囲んで

### 相良賞「銀賞」を受賞して(受賞者コメント)

医学科5年  
小山 毅

この度、相良賞銀賞という名誉ある賞を頂くことができ、とても光栄に思っています。今回の受賞にあたり、忙しい時間を割いて熱心にご指導して下さった、麻酔科の横山教授や河野先生をはじめとする先生方に感謝申し上げます。

麻酔科での研究は、臨床現場での疑問や問題を基礎的な研究で解明していく形態をとっていて、自分の研究のイメージを大きく変える様な刺激的なものでした。今回の研究で得た経験や考え方を大切に、今後自分が勉強し医師として歩んでいく中で、常に研究者マインドを持ち続けて行こうと思います。

医学科5年  
井手 晴菜

念願の相良賞銀賞を今年度もいただきましたこと大変嬉しく思います。腎臓機能再生医療班の研究室では、様々な実験手技やデータの読み方、考察の視点を教えていただきました。一筋縄ではいかないけれど、実は非常に論理的で筋道だった、人体の仕組みの面白さを垣間見ることができた3年間でした。これをきっかけに研究分野にも興味が湧き、将来は腎臓の基礎研究にも携わっていきたくと考えています。

医学科4年  
川口 彩乃

今回、このような栄えある賞をいただき、大変嬉しく思います。今回の受賞は、免疫学教室の先生方をはじめ、多くの先生方がご指導くださったお蔭です。2年次の履修選択で、研究への興味から先端医療学コースを選択した時には、このような賞をいただけるような研究を行うことなど想像すらしていませんでした。今回の受賞を励みに残り1年間、今行っている研究をより一層発展させていきたいと思っております。

医学科3年  
渡部 伸一朗

このたびは、このような素晴らしい賞をいただくことになり、大変光栄に思うと同時に私のような未熟なものがいただいてよいのか、と大変恐縮しております。ご指導いただきました奥原先生をはじめとするメディカルデータマイニング研究班の先生方、横山先生をはじめとする麻酔科学・集中治療医学講座の先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。今回の受賞を励みとし、医療分野の発展に少しでも貢献できるように一層研究に邁進してまいります。



## 初期臨床研修を振り返って



卒後臨床研修センター 舟木 孝志

2年間の初期臨床研修を無事に終えることができ、とても嬉しく思います。この2年間指導していただいた先生方、メディカルスタッフの方々、他施設のスタッフの方々、そして何より関わらせていただいた患者さんに感謝の気持ちを述べたいと思います。ありがとうございました。

この2年を思い返してみると、1年目は戸惑うことも多かったですが、徐々に現場に慣れていき、それに伴って知識や手技が身についていることを実感できて嬉しかったです。しかし一方で、予期しないことやうまく治療がすすまないこともあり、医療の難しさを身をもって実感しました。

2年目になると、より患者さんに接する機会が増え、その分自分で考えて医療を行っていくことが多くなりました。そのようななかで、ある先生が僕に教えてくれた言葉に『健康問題を分子・組織・臓器から地域に至る多様な視点で捉えて、それらの相互関係を踏まえた統合されたケアを行っているか』というのがあります。2年目として自立しようと焦るばかり、病態ばかりに目をとらわれがちだった僕にとって、初心にかえる言葉でした。特に大学病院で診させていただく患者さんは、多くのプロブレムを抱え、多領域にわたって治療をうけている方が多く、また近くは岡豊から、西は土佐清水、東は室戸と広範な地域にわたっています。病態をみるのは大事ですが、そのベースにある生理学的、生化学的現象を理解することも大切だと改めて思いました。また大学病院は高度医療として最新の知見や研究に基づく医療を行う一方で、すべての医療が行えるわけではなく、地域医療との連携が非常に重要であることも再認識しました。今後も多様な視点を忘れずに医療を行いたいです。

4月からは高知大学医学部附属病院で循環器内科医として、新たな一步を踏み出すことになりました。研修を一緒にやってきた同期も多く大学に残っており、これからも皆とともに励んでいきたいと思ひます。

## 初期臨床研修を振り返って



卒後臨床研修センター 黒川 早紀

2年間の研修生活はとてもあっという間で、晴れて医師国家試験に合格し、研修医としてスタートを切った2年前の春がつい先日のことのように感じられます。右も左も分からない状態で研修が始まり、当初は不安ばかりが募っていましたが、分からないことばかりだからこそ新しい知識や経験を積んでいく過程はとても楽しく、毎日が充実していました。

1、2か月毎にローテートする診療科が変わるため、短期間の研修で得られることは限られます。しかし様々な科を回って得た知識を生かして診察や考察を行えることや、多種の検査や治療手技を、その道のプロの先生にご指導いただきやらせていただく機会があることは「研修医の特権」だと思います。この特権を最大に生かして貪欲に研修をすることを極力意識してローテートしていました。

また、どの患者さんも研修医の私が担当することを快く承諾され、診察や治療行為にご協力いただけたことは本当にありがたかったですし、その思いに応えるために誠意を持って診療に携わることを心がけました。時には次の研修先に向かうため、途中で担当医から外れたこともありましたが、途中離脱でご迷惑をおかけしたにも関わらず、皆さんが「頑張っつね。」「立派な先生になっつね。」と声をかけてくれたことが印象的で、とても励みになりました。そして患者さんたちの期待に応えられるような医師になるべく、これからも切磋琢磨していこうと思っています。

3年目からは大学病院の産婦人科医師として新たなスタートを切ることとなりました。2年前と同様、新たな生活の始まりに少し不安も感じますが、研修医時代よりも更に深く、幅広い経験を積めることに期待も膨らんでいます。研修医で積んだ経験を十分に生かしながら、一人前の産婦人科医を目指して頑張ります。

最後になりましたが、円滑な研修生活を送れるようご協力いただき、熱意のあるご指導を賜りました各診療科の先生方や医療スタッフの皆様へ深く感謝致します。

## 初期臨床研修医の成長を見守って

医療育成支援センター長(旧:卒後臨床研修センター)

渡橋 和政

センター長着任の年に研修を開始した学年が初期研修を修了し、その成長ぶりに感慨深い気持ちでいっぱいです。大学にはひとときわ教育に熱心な先輩が集結していますので、さらに後期研修で自らを高めてほしいと願っています。

## 新任のご挨拶

医学部・病院事務部学生課 課長 **立花 広枝** (たちばな ひろえ)



平成28年4月1日付けで医学部・病院事務部学生課長を拝命し、高知工業高等専門学校から参りました立花です。学生課(旧:岡豊学務課)は、平成20年度から3年間務めた部署であり、再びみな様と仕事ができることを大変嬉しく思います。

5年前と比べ学生課の仕事量は増え、また解決すべき課題はより難しく複雑になったと感じて

います。“高等学校教育、大学教育、入試の一体的改革(中教審)”への対応もすでに始まっており、想像以上に多忙で厳しい現状に戸惑っておりますが、周囲の皆様には支援いただき、微力ではございますが、医学部の発展に少しでもお役に立てますよう一生懸命頑張る所存です。どうぞよろしくお願いたします。

## 新人紹介

放射線部 診療放射線技師 **武内 佑磨** (たけうち ゆうま)



今年の4月より診療放射線技師として勤務させていただきます。よろしくお願いいたします。

本院は高知県内では唯一の大学病院であり、先進的な技術、知識を有している病院です。また私自身、家族がお世話になったことのある身近な病院でもあります。そのような場所で働かせていただくことを本当にうれしく思っております。

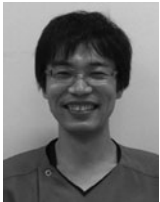
現在担当させていただいている業務は一般撮影です。撮影に関して先輩方から注意される

ことが多々ありますが、どこが問題なのかを丁寧に教えてくれますし、普通のポジショニングではどうしても撮影が困難な患者さんの場合、どう工夫すれば撮影できるかなど大学の授業では学ぶ事が出来ない実践を教えてくださいるので、大変勉強になります。

まだまだわからないことばかりでご迷惑をおかけしますが、今後は皆様に信頼されるような診療放射線技師を目指し、日々努力して参りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 新人紹介

リハビリテーション部 作業療法士 **大石 大** (おおいし だい)

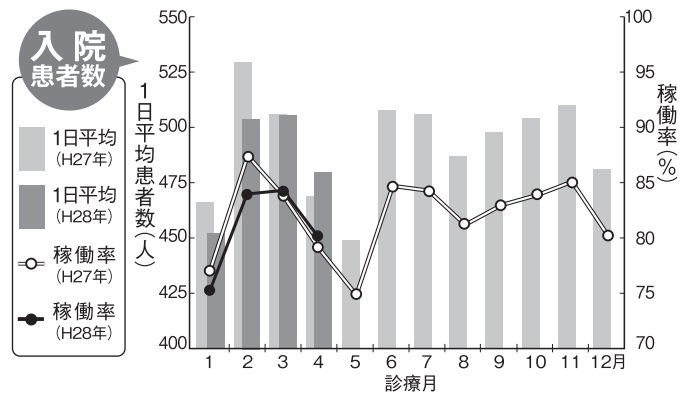
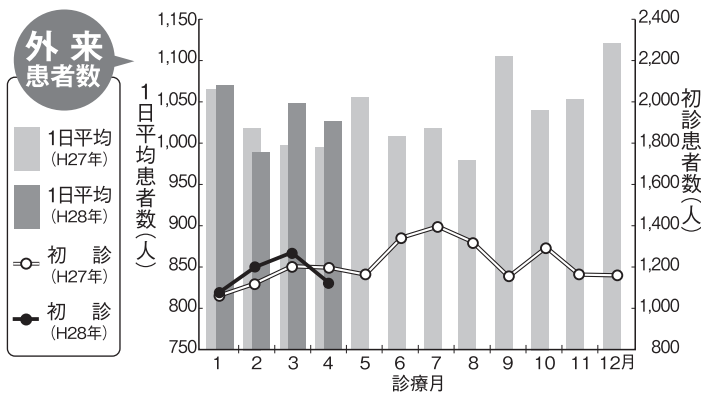


常勤の作業療法士として新採用されました大石大と申します。約30年前に本院で産声を上げ、縁あって就職までお世話になりました。実際は非常勤として7年勤めさせて頂いておりますので、新採用という言葉が似合うかどうか疑問ですが、気持ちだけは新たに頑張りたいと思っております。

現在、作業療法室では脳卒中や運動器疾患

を有する患者さんの身体機能の改善と生活の質向上を目標としたリハビリを行っております。私は特に肩～手指といった上肢の痛みや運動機能の改善を目的とした“ハンドセラピー”を臨床・研究の主題としております。まだまだマイナーな分野ですが、患者さんのために役立つよう日々努力して参りますのでよろしくお願いたします。

## 診療状況



## 編集後記

熊本の地震をはじめオバマ大統領の広島訪問に消費税増税の延期など、めまぐるしく国内情勢は揺れておりますが、医学界も専門医制度の改革で大きく揺れております(詳細は次号に掲載)。熊本地震ではDMAT・

DPAT活動で、高知大学医学部附属病院から複数の皆様活躍されました。南海トラフ地震に備え、今回の貴重な経験が読者の皆様のお役にたてばと、本号1面に活動報告として「本院の熊本地震での支援活動について」を掲載しております。(文責:森信 繁)